の記事の一部が卽位以前の事に關するものなりとするも、一部、而して恐らくは其の大部が、必ず其の以後の事なるべきこと、碑文の性質より考ふるも疑無し。

偖て此の碑文の記事の價値如何に就きては、先にも述べたるが如く、大體上之を信用せざる可らざらんも、然も此等の事實以外に、此の碑に載錄し得ざる事實も少からざりしならんとの想像は、充分に之を加ふべき餘地の存するや勿論なり、されば此の紀功碑に錄する所によりて直に當時回鶻の國勢の隆盛なりしなるべきを推斷すべきには非ず、實に兩唐書吐蕃傳の記する所に據れば、當時却りて其の勢は衰退の情態に在りしを認む可きが如し、卽ち長慶元年唐が吐蕃に遣したる會盟使劉元鼎が、翌二年八月〔一五〇〕使命を了りて國に歸るや、舊唐書吐蕃傳に

劉元鼎自吐蕃使廻奏云、去四月二十四日、到吐蕃牙帳、以五月六日會盟訖、初元鼎往來蕃中、並路經河州、見其都元帥尙書令尙綺心兒、云廻紇小國也、我以丙申年踰磧討逐、去其城郭二日程、計到卽破滅矣、會我聞本國有喪而還、廻紇之弱如此、而唐國待之、厚於我何哉、元鼎云、廻紇於國家有救難之勳、而不曾侵奪分寸土地、豈得不厚乎

と記し、新唐書同傳には之を約筆して

尙塔藏語元鼎曰、回鶻小國、我嘗討之、距城三日、危破、會有國喪、乃還、非我敵也、唐何所畏、乃厚之云々

と記せり、こゝに曰ふ丙申の年は長慶二年の前六年なる元和十一年を曰ひ、本國有喪と云へるは、其の翌十二年に贊普の死せるを指せるものなること疑無ければ、正に保義可汗の治世中に當れるものにして、此の時吐蕃は回鶻を侵して深く其の地に入り、將に都城（恐らく Kara Balgassun の都城の義なるべし）を衝かんとする勢を示したる